「Improvisation: Methods and Techniques for Music Therapy Clinicians, Educators, and Students」の書評

韓　芷瑜

この本は、2004年に出版され、音楽即興を臨床的介入に応用することを目的に、そして「練習」本として、即興の可能性と自由さを示し、それに関するスキルをどのように身につけるかという目標が設定されている専門的な本である。音楽即興の理論の代わりに、この本では、音楽療法実践への応用を目標として、主に音楽即興におけるテクニックを紹介し、そして一緒に購入できるCDと楽譜の実例を通して、さまざまな実践的な即興音楽の例を直接参考にすることができる。さらに、読み手が練習できるように、筆者も様々なテクニックについてどのように練習するかという方法を解説している。その豊かな内容に対し、本書はページ数があまり多すぎず（合計235ページ）、携帯に便利で丁度いい量になっている。英語は母語ではない私にとっても理解しやすい言葉で書かれているが、現在日本語版は出版されていない。

この本の狙いの読み手については、タイトルを見ればすぐ分かる。「臨床家、教育家、学生（Clinicians, Educators, and Students）」という三つの対象が本のタイトルの一部となっている。この本は、初級、中級、上級の音楽的技法と治療方法を提供するものであり、幅広い対象に応用できる。つまりこれは、音楽即興の練習、実践への適応、またはそれらに関する教育というさまざまな目標のために使用できるものである。

この本では、即興におけるスキルを学ぶための例を提供することのみならず、それをどのように音楽療法の臨床に適用するかということも論じられている。クライエントのそれぞれのニーズに応じ、彼らと一緒に、またはクライエント個別に即興を行うために、治療レベルでの音楽即興のテクニックやツール、スキルが紹介されている。従って、ここで筆者は、純粋な「音楽即興」ではなく、「臨床的即興」を中心として論じている。この違いについて筆者は次の様に述べている：

> 「*音楽的即興*（*Musical improvisation*）」とは、ある枠組み内で作成された音と音の任意の組み合わせであると考えている。その一方、「*臨床的即興*（*Clinical improvisation*）」とは、クライエントのニーズを満たすため彼をサポートする環境で、クライエントが音楽療法のセッションにおいて、発した音（意図的または意図的でない）を音楽創作の一部としての使用することである（p.37）。

そして、その具体的内容について、簡単なまとめは次のようになる。各章節は、説明、事例、提案という形式で構成されている。各章のタイトルは、(a) 導入(introduction)、(b) 即興における基本概念（basic concepts in improvisation)、(c) 音楽的テクニック（musical techniques)、(d) 基本的な治療手法とスキル（basic therapeutic methods and skills)（第四章)、(e) 上級レベルの即興手法（advanced therapeutic methods: extemporizing and frameworking)（第五章)、(f) 転換（transitions: in improvisation and therapy)、(g) テーマがつけられた即興（thematic improvisation)、(h) 集団即興（group improvisation)（第八章)、(i) 即興音楽を分析し、報告する二つの手法（two different methods for analyzing and reporting improvised music)、である。より具体的にいえば、第四章では模倣、会話、伴奏、第五章ではスタイル、第八章では即興の準備など、即興における具体的スキルも含まれている。この様に本書は、基本的な音楽技法や治療方法について解説し、そしてより上級なテクニックへと展開、発展する構成になっている。また、実践的かつ発展的な方法を説明するためCDに収録されている例は、あるテクニックを実践し、スキルを向上させるための方向性を与えている。CDでは、ピアノの即興演奏の例を提供するだけでなく、クライエントが演奏するであろうピッチのない打楽器（ドラム、シンバルなど）やピッチのある打楽器（木琴、鉄琴など）の音源も含まれており、さまざまな場面において対応できる。

この本の筆者は、トニー・ウィグラム（Tony Wigram、1953–2011、イギリス人）であり、音楽療法に多大な貢献をした人物である。ウィグラムは、現在の音楽療法の出版物で最も多作な作家の一人であり、音楽療法に関する14冊の本を執筆または編集し、70以上の章を本に執筆した。彼の研究には、自閉症とコミュニケーション障害の評価と診断、そして音楽療法の臨床実践における方法と技術などに関するものがある（Odell-Miller, 2011)。そして、この本は、上級レベルにある音楽療法の学生に音楽即興スキルを教えてきたウィグラムの長年の経験と、臨床実践におけるピアノやさまざまな楽器を用いた即興テクニックの研究に基づいたものである。

本書においては、ウィグラム自身の研究や経験以外にも、多くの専門家の研究と理論を引用し説明している。ここで、最も引用されているものの一つは、ケネス・ブルシア（Kenneth E. Bruscia）の研究である。例えば、ブルシアが開発した即興アセスメントのプロファイル（Improvisation Assessment Profiles）を最後の章において用いている。これは、最も包括的で適切な臨床即興の分析方法として、クライエントの変化（または変化の欠如）を分析するために音楽的要素に焦点を当てているものである（ブルシア、1987/2020)。また、分析的音楽療法の開発者としてメアリー・プリーストリー（Mary Priestley）も、この本の中で言及されている。転移と逆転移を論じるために、筆者は彼女の精神分析的アプローチにおける研究を参考にしている。例えば、プリーストリーは逆転移を、セラピストが感情、態度、動機、価値観、信念、行動パターンを持って治療的状況に臨むプロセスで

あると説明している。即興では、特にセラピストの感情がクライエントの表現している感情と関係ある場合において、それに常に注意を払う必要があると示唆している（Priestley, 1975）。ウィグラムも、無意識の感情は、臨床即興の応用において注意深く取り扱う必要があると考え、その上で逆転移についていくつかの代表的な専門家の文献を引用している。

即興というのは、音楽的要素から即時的に「無」から音楽的に「有」とする創造的プロセスである。読者はこの本を理解する上で、それぞれ違う読み方や観点を持つと思う。何故なら即興をする人は、それぞれの音楽的歴史や背景、環境によって、この本に対する視点が異なってくるからである。よって、例えば私は音楽科出身であるので、例に示されている五線譜を通して、即興音楽の要素や特徴を理解できた。一方、音楽科出身ではない、もしくは五線譜が馴染みではない読み手には、その方法は適用できなくても、CDの例を聴いて参考にすることができる。この本はこのような工夫により、幅広い読者に使えるものになっている。このことは、タイトルに「臨床家、教育家、学生」とある通り、筆者が設定した幅の広い読者に向けるという部分で目的と内容が合致している。

音楽は、文化、あるいは環境と深く関連しているものである。つまり音楽療法は音楽という文化的な媒体や経験を用いた治療であると言える。それは、クライエント自身の多様な音楽的歴史や文化背景、彼らの生活している環境も治療に関係してくるということである。音楽療法は文化に基づくワークであるので、地域により、即興における音楽的素材も異なってくると考えられる。この本で筆者は、イギリス人として、彼自身の地域による文化、もしくは西洋音楽的発想に基づいて、この本に多くの即興音楽要素を紹介し、いろいろな組み合わせを提案している。例えば、第五章において、ジャズ、スペインとラテンアメリカンにおけるスタイル、教会旋法といった西洋音楽の音楽的素材を中心として、上級レベルの即興テクニックを示している。しかし、西洋以外の文化における音楽要素は、本書において示されていない。他の地域の異なる音階やスタイルを紹介されていれば、より内容が豊かになり、さまざまな文化圏においても実用できるようになったと思う。日本の例として、ペンタトニック、日本音階、沖縄音階などの地域による独特な音楽の組み合わせは、日本の臨床現場においてよく応用されているだろう。また、この中のペンタトニックという音階は、ピアノの黒鍵でできるため一つ使いやすい手法として、東洋だけでなく西洋圏でも音楽療法の臨床場面において頻繁に活用されていると考えられる。セラピストは、クライエントがペンタトニックを中心としての即興するために、どのように異なる楽器や音楽要素を組み合わせられるのかといったことを考える必要がある。しかしながらこの本において五音階の使用については特に触れられていない。この部分については、異なる文化背景を持っている様々な専門家たちからの臨床即興における新しい知見がもたらされると期待したい。

音楽即興の学びは、おそらくどんな音楽家にとっても非常に挑戦的な目標だと言える。

その上、臨床的音楽即興というのは、単に音楽的目標としての演奏のみならず、クライエントのニーズに応じて治療関係に基づき臨床的目標達成に向けて発展するものである。ゆえに、実際に臨床的音楽即興による治療プロセスを系統的にまとめることは非常に困難だと考えられる。しかし、この本において筆者は、臨床即興におけるスキル、応用、テクニック、種類を詳しく系統的に論じており、そして、それらの音楽即興の体系を、どのように音楽療法の臨床分野で適用するのか、どのようにクライエントの即興を治療レベルで対応するのか、どのように臨床即興の組み合わせを活用するのか、理解しやすい示し方で説明している。よって、この本は音楽療法学界に対して非常に貴重な資料だと思う。この本は練習本としても、実用的なツールとしても、または教科書としてもさまざまな目的に応用することができるであろう。音楽療法の領域で頑張っている人たちは、そのキャリアにこの実用的な本を取り入れ、独自の治療的即興の開発を続けていくと、この学問領域は日々発展、充実し、より深い研究へと進展するかもしれない。

参考文献

Bruscia, K. (1987). *Improvisational models of music therapy*. Charles C Thomas Pub Limited.

Bruscia, K. (1994). Transference and counter-transference. *Unpublished lecture notes in Aalborg University, Department of Music Therapy*.

Odell-Miller, H. (2011). Memories of Tony Wigram: His early career. *Voices: A World Forum for Music Therapy, 11*(3). doi:10.15845/voices.v11i3.599

Priestley, M. (1975). *Music therapy in action.* Constable.

Wigram, T. (2004). *Improvisation: Methods and Techniques for Music Therapy Clinicians, Educators and Students*. Jessica Kingsley Publishers.

ブルシャ、ケネス・E （1987/2020）「即興音楽療法の諸理論」（林庸二監訳　Improvisational models of music therapy）　人間と歴史社